

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1. 予期せぬ出来事

1-1

辰巳太郎を乗せたタクシーは外堀通りを走っていた。国会議事堂は数日前に総辞職した麻生内閣の一片の残滓すら見せずに、花崗岩でできた壁面を、投光機によるライトアップで青白く浮揚させていた。

2009年9月20日(日曜)。辰巳は、新神戸駅から三時過ぎの山陽新幹線上り「のぞみ」に乗り込んだ。

季節にしては車内の冷房が快かった。

五十六歳になる辰巳は、「灘の生一本」で知られる大阪湾岸の御影郷に、江戸時代から続く醸造家の十四代目を継承していた。

同志社大学ラグビー部で四回生の時、憧れの背番号二番を貰い、フッカーとして活躍していた頃は、身長176センチにも関わらず、体重は101キロもあったが、今では70キロを維持するように心がけている。

現在、御影郷だけでも、十社余りの清酒メーカーが鎬を削っている。

資本金五億円、従業員数四百名の辰巳が経営する『H酒造』は、清酒の他に、焼酎、味噌、輸入ワインなどの販売を手掛けている。

辰巳は月に一度の割で、銀座五丁目にある東京支社に出向いていた。

グリーン車の背もたれを程良く調節した辰巳は、頭の中をフルリセットするために、一週間前に例会で対戦したチェスの棋譜を読み始めた。仲間のロータリアンに誘われて、神戸チェスクラブへ入会して5年になるが、棋力を示す指標のレーティングは1800で、将棋に置き換えると二段位である。

ホテルオークラ本館の正面玄関に停車したタクシーの後部ドアが開くと、「辰巳様、ようこそいらっしゃいました」

降り立った辰巳に、ドアマンが、さりげなく呼びかけた。

帝国ホテル、ホテルニューオータニと旧御三家と並び称されたホテルオークラ東京は、近年、進出著しい新規外資系ホテルに、その牙城を脅かされているが、ミシュラン東京ガイドで五つ星の評価を受けるなどして、一流の格付けをどうにか保持していた。

陶芸家で人間国宝富本憲吉最晩年の作といわれる『思弁花文織成壁』を右手に、真正面の窓際には大障子があり、吹き抜けの天井からは六角形の切小玉を連ねたランタンの柔らかい明かりが映えていた。